

2007年

02号

## 学術の新しい風

～見えないものを見るために～

New Research  
Initiatives  
in Humanities  
and Social  
Sciences

人社プロ

独立行政法人

日本学術振興会

人文・社会科学振興プロジェクト研究事業

New Research Initiatives in Humanities and social Sciences

人社プロ・ニューズレター

巻頭エッセイ：

## 出会だけが学問(人生)だ



## 沼野 充義

東京大学大学院人文社会系研究科教授

専攻：ロシア、ポーランド文学

著書：『徹夜の塊一亡命文学論』など。

この4月から、大学で「現代文芸論」という新しい専修課程を担当することになった。耳慣れない名前なので、いったい何をやるどころですか、と聞かれることが多く、公式的には「広く世界の文学を現代的な観点から（日本も世界の一部として視野に入れて）研究するところです」と答えることにしているのだが、それでもたいていの場合、げげんな顔をされる。そこで考えたのだが、いっそ、「文学の新たな出会いを準備する場所です」と言ってしまうたらどうだろう。そもそもこれまでろくな本も論文も書いてこなかった私が、少しでも誇れるものがあるとしたら、せいぜい「出会い」の場を作ってきたことでしかないような気がする。

たとえば、2001年10月、忘れもしないあの9・11事件の直後だが、国際交流基金の助成を受け、日露作家会議を東大で開催したときは、ロシアからアクーニン、ペレーヴィン、ソローキン、トルスタヤといった、現代ロシア文壇を代表する最も重要な作家を何人も招待し、一堂に会してもらった。ロシアで同席するようなことはまずない顔ぶれで、この出会いの魔法が生ずるために作家たちはロシアの境界を越えなければならなかったのである。

また2002年7月、＜東京の夏＞音楽祭では、作曲家グバイドゥーリナと詩人アイギのコンサートを実現できた。アイギはチュヴァシという少数民族出身のロシア語詩人で、ノーベル文学賞の有力候補といわれたことが何度もあった。一方、現代最高の作曲家の一人グバイドゥーリナは、亡命してドイツ在住だがソ連出身で、タタール民族の血をひいている。モスクワで地下活動をしていたころからの旧友であるこの二人を迎えて、東京のコンサート会場は詩人と作曲家の数十年ぶりの歴史的再会の場に変貌したのだった。

考えてみれば、学問も芸術も、すべては他者との出会いである。どんなに狭い専門領域に沈潜していようと、そもそも研究者が自己の殻を越えて、研究対象と「出会う」ことがなければ物事は始まらない。学問を深めるためには境界の中にある程度禁欲的にとどまらなければならないが、あまりに「とどまり」過ぎれば、枯渇して衰退するしかないだろう。生物が生き延び、種を発展させていくためには、自分の殻を破り、新たな出会いを探ることが必要だ。そして、人文社会系の学問というものも（それが学問だとして）、その意味では生き物なのだ（きつと）。



アイギとグバイドゥーリナを迎えて  
下段左グバイドゥーリナ、後列中央アイギ、前列右はアリオン音楽財団理事長の江戸京子氏



日露作家会議で来日したロシアの「文豪」たち  
スタッフと寿司に舌鼓を打つ

## 「安心・安全・安楽とまちづくり」

### 環境哲学の可能性

桑子 今日、まちづくり、地域づくりをキーワードにしてお話していきましょう。

村松 哲学者は散歩しかしないと聞いていますが、桑子さんは散歩以外のこともしていますよね。なぜでしょうか？

桑子 『環境の哲学』を書いた時（1999）、行政関係者に読んでほしい、という思いで書いたんです。すると、国土交通省の大臣官房から「公共事業のあり方について提言を」というオファーがきて、それ以来、同省とおつきあいしています。

村松 河川法の改正なども関係ありますか？

桑子 河川法が1997年に改正され「環境への配慮」と「住民意見の反映」ということが二本柱として新しく入りました。住民参加のあり方に行政（国）側が関心を持つようになってきました。そうしたことから「合意形成」というキーワードに関心が向いてきたんです。

### 環境問題と神々の世界

村松 人社プロジェクトの中にも、河川のことをやっている方が（ニューズレター第1号の中山先生など）何人かおられますよね。桑子さんとの違いは何でしょう？

桑子 合意形成や住民参加を考える時に、日本的な合意の伝統システムをベースにしようというのが私たちの基本です。地域に伝承されている話し合いの知恵などを掘り起こして、現在に生かそうと考えています。

村松 人文的な関心を中心ですね。

桑子 実際にあちこちに行ってみますと、『古事記』『日本書紀』『風土記』の世界が日本の各地に広がっていて、それが水管理のあり方に大きくかかわっているとわかってきました。地域の人たちと空間を見分ける、つまり、現地に行くと「どうしてここに神社があるのか」ということを地元の人たちと議論すると、新しい発見が一杯あるんです。

### 建築史と建築物の保存

桑子 村松さんは一理系には珍しく一過去を読み解いていくことを重視していますね。

村松 もともと建築史に関心があり、中国から研究を始めて、アジア全体のことをやっています。ここ200年位のアジア全体の都市や建築のことを調べていると一般の歴史家ですら知らないことがわかったりします。また、古い建物を発見すればとにかくうれしいし残していきたいと思います。

桑子 建築物の場合、残すというのは難しくないですか？

村松 はい。自分が調べたもの、価値があると思うものが、壊されていく。そのときには無力感を感じますね。1980年代後半くらいから中国の人たちと一緒に、中国主要都市の近代建築を全部リストにしたんですけども、ここ10～20年でほとんど壊されてしまった。

桑子 新しい都市計画が古い建築物を壊していくという現実。

村松 確かに新しいものを建てるには古いものを壊さなければいけない。ジレンマです。建築史家が強行に残せとモノ申しても常に受け入れられるわけではありません。

桑子 その時どうしますか？どのようなアプローチが村松流ですか？

村松 まず1つ目。どういう建物がまちの中にあるかを探し出します。

桑子 その事実を人々と共有することが2つ目ですね。

村松 3つ目は子どもたちにまちの大切さを伝えることです。長い目で見ればこうしたアプローチも大事です。

桑子 京浜工業地帯に関心をお持ちだそうですね。

村松 産業遺産というともっと古い、明治初頭のものを連想するのですが、京浜工業地帯は「産業遺産」ではあ

対談者

**村松 伸**

東京大学生産技術研究所准教授

専攻：アジア建築史、都市文化遺産資産開発学

著書：『中華中毒』、『上海—都市と建築』

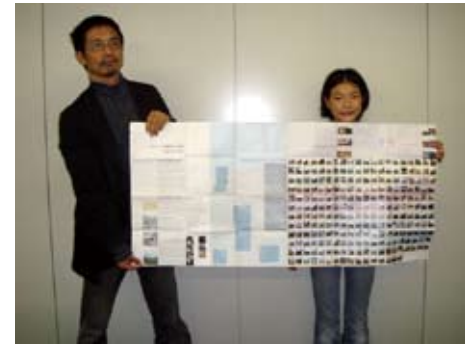
りません。でも、そこには現在でも人がずっと住んでいるわけです。生きている工業地帯で、新しい価値を「発見」したい。それが人社プロジェクトでわたしがおこなっている4本目の柱です。

桑子 村松さんはヘリテージマップ (Heritage Map) というのを提唱されています。

村松 まず研究者の視線から建物を評価します。次にそこに住んでいる人に評価してもらいます。ヘリテージバタフライという蝶の形をつかって、右側が専門家の知恵、左側が市民の知恵、それが個々の建物にどれくらい残されているかを描くのです。

桑子 専門家の評価と住民の評価という二つの羽のバランスがとれないと、うまく飛べないし未来につながらない。

村松 ジャカルタで試作したら、学生たちが頑張ってくれていいものができました。



## 地域での「発見」による和解

桑子 色々な立場のバランスということで言うと、私がかかわっている例があります。地域にとって、たとえば何もないような海岸に道路を造るという計画があって、地元の人が「いい景色のところを壊すのは問題じゃないか？」と問題提起をしました。

村松 桑子さんの人社プロジェクトのグループが呼ばれてワークショップをやったんですね。

桑子 私たちは河川構造、建築、人類学の先生たちと同行します。そうすると、見え方が全然違うんです。たとえば壊されようとしている海岸にある神社の神様は、龍姫 (豊玉姫という海の神様の娘) だとわかる。

村松 『古事記』の海幸彦・山幸彦の世界。海の豊穡と航海の安全を守るために作られた神社を漁師たちが壊そうとしている。

桑子 一方で、海岸を守ろうという人たちもはじめは「いい景色だから」からはじまります。でも、地域の産業とか、もっと広域的な文化的な意味を重要な要素として空間を位置づけていることがわかってくると、対立を和解に変えることもできるんです。

## 安心・安全・安楽

桑子 建築とか土木とか都市工学をやっていると、ハード (具体的建築物) を作る部門とソフト (抽象的機能) を考える部門とではかなり違います。

村松 今の世の中は「安心・安全」という呪文があって、この言葉の強さには負けそうになることが多い。そこで安心・安全だけではなく「安楽」が重要だという提案をしています。3つが合わさって初めて人間らしい幸せみたいなものができるんじゃないでしょうか。これは、人文・社会科学からの貢献のひとつだと思います。

桑子 安楽は安心とは違いますね。たとえば、釣りのポイントだとか、お祭りが楽しいとかね。

村松 釣りも祭りは安楽だけけど、安全・安心ではない。

桑子 夕日のきれいな海岸も完全な安全・安心ではない。景観を大事にするのも安楽志向ですね。

村松 安楽の部分がないと観光客が来ない。安全・安心だけでは人をひきつけないですね。

桑子 安全・安心のためのハードには楽しみとかクリエイティブ、創造性とかも含まれていますよね。

村松 それを安楽という言葉で代表させたいのです。

桑子 安楽を求めて観光客が来るようになれば住んでいる人のプライドも芽生える。

村松 安楽には様々な要素がありますね。

桑子 私たちのように過去を探ることでまちづくりのための補助線を引き直すのも、一つの方法だと思います。

村松 現地を複眼でみていく桑子流ワークショップが大事ですね。

桑子 村松流の価値掘り起こしやヘリテージバタフライにも期待しています。



対談者

**桑子 敏雄**

東京工業大学大学院社会工学研究科教授

専攻：システム専攻価値構造講座担当

著書：『環境の哲学』『風景のなかの環境哲学』

プロジェクト紹介1:

阪神大震災から12年、  
「ふつうに戻った社会」のなかで…  
「被災地の現場における共生社会の構築」



代表者

**岩崎 信彦**

神戸大学文学部教授

専攻：社会学、社会リスク論

著書：『21世紀への橋と扉』など

New Research Initiatives in Humanities and social Sciences

人社プロ・ニューズレター

阪神大震災が起きてはや12年が過ぎた。被災地市街には震災の爪あととはもう残っていない。完全に復興したのか、いやそうではないのか？ それを検証する一つの材料は、10年後の2005年1月に実施された兵庫県「生活復興調査」([http://web.pref.hyogo.jp/wd33/wd33\\_000000713.html](http://web.pref.hyogo.jp/wd33/wd33_000000713.html))である。そこに示されている特徴的なことは、2003年調査と違って「被害程度と生活復興感にはもはや直接的な因果関係はなくなっていた」(129頁)ことであり、もっと興味深いのは、「被災者の『公・共・私型社会意識』の根幹にあった共和主義(住民主導)的な意識がかなり低下したことによって、生活復興感…との関連性がなくなったこと」(131頁)である。つまり、10年を経て、「近所づきあいや地域活動への参加が低下するという傾向は確認され、生活復興感の高まりに伴って、『喉元過ぎれば熱さを忘れる』現象が再度確認された」(129頁)のである。このようにして被災地は「ふつうの社会」に復帰したのである。

しかし、これは被災地の一般的な意識を表現するものである。「震災による影響を脱して日常の生活に戻った層と、震災の影響で未だ再興途上にある層に分化している構造がより明瞭になった」(120頁)ことも示されている。じっさい、同時に行なわれたパネル調査(2001年、03年、05年の調査に継続的に回答してくれた297名)によれば、3時点ともに生活復興感が非常に低いタイプは21.9%、平均以下で安定しているタイプは25.6%である。これらには、被害が大きかった人、心とからだのストレスが大きい人が多く含まれており、震災の傷はまだ癒えていないと言うべきであろう。

ところで、仮設住宅で大きな問題になった「独居死」のその後はどうであろうか。災害復興公営住宅における独居死は、2000年から順に、56人、55人、77人、68人、69人、66人と横ばい状態である。ただ、気がかりなのは、発見までに1ヶ月以上かかった事例が、順に2人、6人、1人、2人、2人、0人、5人と、2006年になって再び増加していることである(読売新聞、2007年1月12日)。コミュニティの絆の脆弱な復興公営住宅をサポートしてきた、24時間常駐のLSA(生活援助員)が、2005年度を最後に国から援助を打ち切られた。そのことも影響しているのではなかろうか。

こうした問題は「高齢社会」を先取りしている、と言われてきた。しかし、被災地が先取りしているのは、これだけではない。「ボランティア元年」と言われて以降、ボランティア活動は、災害救援、地域づくり、市民メディア、多文化共生などの分野で被災地に根ざして展開している。それらは、人社プロ・シリーズ本の1巻として刊行予定の『市民の社会を創る—多元共生社会へ向けて(仮)』に収録される。乞うご期待である。

プロジェクト紹介2:

デジタル時代の

## アナログ・データの必要性

「自己表現の生成と変容」



代表者

柏木博

武蔵野美術大学教授

専攻: 近代デザイン史

著書: 『モダンデザイン批判』 岩波書店02年、

『「しきり」の文化論』 講談社04年など

New Research Initiatives in Humanities and social Sciences

人社プロ・ニューズレター

『モード・オブ・ザ・ウォー』という展覧会が東京飯田橋の印刷博物館で開催された(3月25日まで)。東京大学大学院情報学環が所蔵する第一次世界大戦期のプロパガンダ・ポスターのコレクションからアメリカのポスターを中心に、約120点を展示している。多くは1917年から19年にかけて発行されたポスターだ。そこから、アメリカのプロパガンダがどのようなものであったのかを見ることができるとはもちろんだけれど、同時に、グラフィックデザインや印刷技術など、多様な視点から鑑賞することができる。

これらのプロパガンダ・ポスターが同時代のアメリカにおいて、どのような組織によって推進され、どのような組織が動員されたのかといった歴史的な視点から押さえておく必要がある。こうしたことについても、的確な情報を与えてくれる展覧会だ。

ポスターの図像表現にかぎって目をむけるなら、そこには、この時代にかぎらず現在にいたるまでのアメリカの大衆文化に見られるイメージが多く埋め込まれていることがわかる。具体的には小説や映画などにあらわれる場面や人物のイメージである。「良き母親」「勇敢な若者」「良き市民」などなど。つまり、アメリカの大衆文化に潜在し続けるイメージがどのようなものなのかを見ることができるとはもちろんだけれど、同時に、グラフィックデザインや印刷技術など、多様な視点から鑑賞することができる。アメリカの大衆に埋め込まれたイメージのタイポロジーと云っていい。

また、この展覧会、コレクションで重要なことのひとつは、ポスターの印刷に関するデータが押さえられていることだ。これまでも20世紀前半のポスターの展覧会は数多く開催されてきたけれど、印刷に関する詳細なデータが表記されたものはほとんどなかったと云っていい。

大まかに言えば、これらのポスターには、凸版、平版、凹版、孔版が使われており、平版だけをとってみても「多色描画石版」「多色写真製版」「プロセス製版」がある。この時代のポスターには、実に多様な技術が使われている。

20世紀のポスターをふくめたグラフィックデザインに関しては、今後さらに、印刷データ(いわばアナログ情報)の必要性が出てくるように思える。東京大学のコレクションは、およそ660枚ほどある。このコレクションは、現在インターネットで公開されている。「東京大学大学院情報学環アーカイブ」の名称で検索できる。デジタル情報時代のすばらしい面である。

図像の情報や資料は、今後ますます誰もが使えるように公開されていくことが望ましい。その際に、20世紀のグラフィックデザインの場合、印刷データが入っていることが重要になってくる。というのも、図像はデジタルなデータでどのようにも使うことができるが、そのオリジナルがどのようなものであったかは、データがなければまったくわからないからだ。石版(リトグラフ)で表現したのか、凹版(グラビア)で表現したのか、デジタル画像のモニタではその違いはわからない。

デジタル時代の現在のイメージ資料こそ、アナログのデータを押さえておく必要があると感じさせる展覧会である。



第一次大戦中のアメリカのプロパガンダ・ポスター「家庭と国のために」

## 活動報告 1

# 若手の会の活動報告

若手の会は、人社プロジェクトに参加する若手メンバーを中心としたヴォランティアな会です。各参加者が、他分野の若手研究者との交流を通して、分野横断的 / 学融的な新たな課題と、それに取り組むための仲間をみつけ、具体的にプロジェクトや研究を立ち上げていくための交流の機会を作ることを目的としています。ML 登録者は現在 50 名で、主な活動内容は、年 2 回の若手フォーラムの発行と冊子『SIM PATIA』の発行とを行っております。

若手フォーラムの第 1 回では、「科学と〇〇のはざままで」と題して、心理学・歴史学・社会学の立場からそれぞれ発表がありました。第 2 回では、「医療・選択肢・幸福」と題して、文化人類学と心理学の立場から発表があり、建築歴史学と環境宗教学の若手研究者が指定討論を担当しました。各回とも 20 名程度の参加があり、時間が足りないくらいの議論がありました。それぞれの発表内容は冊子『SIM PATIA』に掲載されています。

なお若手の会ではメンバーを募集しております。詳しくは下記の URL をご覧ください。

[http://www.ritsumei.ac.jp/acd/re/k-rsc/hs/kenkyu\\_2004/wakate\\_index.html](http://www.ritsumei.ac.jp/acd/re/k-rsc/hs/kenkyu_2004/wakate_index.html)

荒川歩 (名古屋大学)

## 活動報告 2

# 「イノチのゆらぎとゆらめき」シンポジウム

3 月 9 日午後、「イノチのゆらぎとゆらめき」をテーマとしたシンポジウムが開催された。第一部は「生命改造技術のインパクト」(司会は大土泰弘)、第二部は「生命観の諸相」(司会は木村武史)と題し、それぞれ三名のパネリストの発表と討論が行われた。第一部のパネリストは、瀬名秀明(作家)、野地澄晴(徳島大学)、林良博(東京大学)、第二部のパネリストは金森修(東京大学)、石田勇治(東京大学)、有田隆也(名古屋大学)であった。

本シンポジウムが目指したところは生命改造技術の発展に伴う生命観のゆらぎと、それも踏まえた生命観の多様な対応の可能性(ゆらめき)について討論することにあつた。第一部では主に生命改造の現場にいる技術者と作家の視点からの発題があり、第二部では、それらが含み持つ哲学的・政治的問題が提議され論じられた。また、プログラムとしての生命という観点から人工生命の研究との結びつきも提示された。

木村武史 (筑波大学)



シンポジウム「イノチのゆらぎとゆらめき」

## 風を受け、舵をとれ シリーズ・人社の若手たち：

# ドイツの教科書研究所の風景

初めて一人でドイツを訪れたのは 1996 年。卒業論文の作成のためにブラウンシュヴァイクという町のゲオルク・エッカート国際教科書研究所を訪れたときだった。ヨーロッパでは、ドイツとフランス、ポーランドなど旧交戦国間の和解のために歴史教科書対話が重ねられる一方、進展する地域統合のなかで共通のヨーロッパ史をいかに記述するかをめぐる模索も続けられてきた。その双方の動きの中心にあるのがこの研究所である。併設された図書館に所蔵される教科書コレクションは全 23 万冊におよぶ。欧州評議会の教科書センターとしても機能する同研究所を歴史教育に関心のある人で知らない人はいないが、中の雰囲気は意外なほどアットホームであり、図書館の片隅に座って教科書をめくっていると、司書の方がお茶の時間に紅茶とクッキーを差し入れてくれたりする。その雰囲気に引かれて、ドイツの歴史教科書の研究からすっかり離れられなくなってしまった。

川喜田敦子 (東京大学ドイツ・ヨーロッパ研究センター・特任准教授)



研究所の蔵書目録(下段)とドイツの現行の歴史教科書(上段)。2006年に独仏共通の歴史教科書がはじめて出版された(右)。

自著を語る：

## 『大正期新興美術資料集成』

近年、日本の近代美術に関する基礎資料の出版がさかんである。美術専門誌、年鑑、主要展覧会目録の復刻から、専門誌掲載記事の索引、展覧会出品作品目録まで、美術史研究の基本ツールが整い始めている。本書の眼目は個々の作家ではなく、ひとつの「運動」の流れを、主要なグループとそのメンバーが関係した展覧会を資料中心にして再構成することである。目録が残されている場合は出品作一覧を付し、作品図版や同時代文献を示しつつ、展覧会の内容を簡略に紹介している。これと別に主要作品はカラー図版あるいは鮮明な白黒図版として収録してある。また資料収集に関わった研究者による学術論文、この分野を専門とするライブラリアンによる網羅的な参考文献も掲載した。こう記してみれば、すこぶるオーソドックスな構成であるといえる。しかし、意外なことというべきか、近代美術史関係でも類書は見あたらない。本書が活用されることを願うばかりだ。

五十殿利治（筑波大学）



人社キーワード：

## 科学技術の軍民転用

民生用に開発された科学技術が軍事目的に転用されること、逆に軍事目的に開発された科学技術が民生用に利用されることを「科学技術の軍民転用」と呼ぶ。このように軍事・民生両方に用いられる技術を「軍民両用 (dual use) 技術」とも呼ぶ。

具体例として、軍事技術が民生用に転用された代表例は原子力技術である。しかし、平和目的の原子力技術や施設は、当然のことながらまた軍事転用が可能であるため、国際社会は厳しい防止策を考えてきた。残念ながらイランや北朝鮮の例に見るように、国際ガバナンスの改善が必要とされている。北朝鮮核実験で注目された地震検知技術や衛星写真は、民生用技術が軍事転用防止に貢献しているよい例でもある（写真）。

一方で、日本が民生用として開発している先端技術（ロボット、ナノテク、電子情報技術等）が軍事転用されるリスクも高まっている。新たな国際ガバナンスの確立を目指し、日本の役割はきわめて重要だ。

鈴木達治郎（東京大学公共政策大学院客員教授）



北朝鮮の核実験場所（推定）上：  
2006年10月13日（実験後）、下：  
同9月17日（前）出所：Institute  
for Science and International  
Security (ISIS), website  
<http://www.isis-online.org/publications/dprk/dprktestbrief17october2006.pdf>

## 編集雑記

人社プロの全体を見渡せるものとしてご好評をいただいていたニューズレター「学術の新しい風」、創刊号発刊から日がたつてしまいご迷惑をおかけしました。デザイン力・発信力強化を目指してここに第二号をお届けします。第三号以下、第六号までの企画・記事は準備が整っています。これからは怒濤の発刊で、みなさまに新鮮なニュースをお届けします。（編集長 S）

本編の校正中、対談の中に私の故郷である「京浜工業地帯」の文字が！！なんだか懐かしい気持ちになりました。近くにあるのに帰ってないな～。（事務局 k）

編集作業ではメールの送り方ひとつとっても勉強になることがいっぱいでした。これを自らの成長の機会とすべく、これからも頑張ります！（編集見習い H）

# 「飛び出す人文・社会科学～津々浦々学びの座～」

人社サイエンスカフェが  
11月に全国で開催されます！

## ● 研究の先端を行く学者のひと、 科学について語り合いたいと思いませんか？

サイエンスカフェとは、講演などと異なり、お茶を片手に互いに言葉を交わして作り上げていく場です。このたび、人社プロジェクトでは11月に、いくつかの会を全国で開催することになりました。気負わずに、ちょっとコーヒーでも飲みながら、科学談義に花を咲かせる…そんな新しい関係を築きたいと思います。

テーマは多様です。たとえば、既に7月に行なわれた企画では、「高校生と国際協力を考える」（東京）、「川と上手につきあう総合的な治水の実現」（兵庫）など、様々な切り口から人文社会科学について語り合いました。

なお企画一覧、申し込み方法については以下をご覧ください。[http://www.jsps.go.jp/jinsha/11\\_science.html](http://www.jsps.go.jp/jinsha/11_science.html)

### アウシュヴィッツが投げかける問い 21世紀はこれにどう答えるのか（愛知）：

「アウシュヴィッツ」が提起する人類世界への問いを、ジェノサイド研究、歴史学など様々な視点から掘り下げ、21世紀を生きる私たちの課題について話し合います。

日時：11月17日（土）

時間：14:00-16:00

場所：松坂屋岡崎店 6階

コミュニティサテライトオフィス

問い合わせ、申し込み：

[genocidestudies@cgs.c.u-tokyo.ac.jp](mailto:genocidestudies@cgs.c.u-tokyo.ac.jp)（担当：佐治）

### ミュージアムの未来ーロボットとアーティストと語る私たちの美術館（岡山）：

ロボットを用いた美術鑑賞支援を中心に、保管するだけでなく活用する場としてのミュージアムの可能性について語り合います。

日時：11月17日（土）

時間：17:00-19:00

場所：大原美術館

問い合わせ、申し込み：

[yangi@ohara.or.jp](mailto:yangi@ohara.or.jp)（担当：柳沢）

## ● 目次

出会いだけが学問（人生）だ	1
対談「安心・安全・安楽とまちづくり」 村松伸×桑子敏雄	2
プロジェクト紹介：1	
阪神大震災から12年、「ふつうに戻った社会」のなかで…「被災地の現場における共生社会の構築」	4
プロジェクト紹介：2 デジタル時代のアナログ・データの必要性	5
活動報告：1 若手の会の活動報告／	
活動報告：2 「イノチのゆらぎとゆらめき」シンポジウム／編集雑記	6
風を受け、舵をとれ シリーズ・人社の若手たち：ドイツの教科書研究所の風景／	
自著を語る：『大正期新興美術資料集成』／人社キーワード：科学技術の軍民転用	7
告知「飛び出す人文・社会科学～津々浦々学びの座～」	8

○編集 : 「学術の新しい風」編集委員会  
編集長 : サトウタツヤ（立命館大学・教授）  
第3領域の「ボトムアップ人間関係論の構築」  
グループリーダー  
編集担当 : 日高友郎（立命館大学・学生）  
デザイン : 三村豊（東京大学生産技術研究所・学生）  
事務局 : 小暮、糸井（日本学術振興会研究事業課企画係）

○発行 : 独立行政法人 日本学術振興会  
研究事業部研究事業課  
人文・社会科学振興プロジェクト研究事業担当  
住所 : 〒102-8472 東京都千代田区一番町8（FSビル7階）  
電話 : 03-3263-4645  
Email : [jinsha@jsps.go.jp](mailto:jinsha@jsps.go.jp)  
<http://www.jsps.go.jp/jinsha/>  
○印刷 : 株式会社 創造社